令和七年度

神奈川県公立高等学校入学者選抜学力検査問題

共通選抜　全日制の課程（追検査）

Ⅱ　国　語

注　意　事　項

1　開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。

2　問題は **問五** まであり、**1**ページから**14**ページに印刷されています。

3　解答用紙の決められた欄に解答しなさい。

4　文字や数字などを記述して解答する場合は、解答欄からはみ出さないように、はっきり書き入れなさい。

5　マークシート方式により解答する場合は、選んだ番号の ◯ の中を塗りつぶしなさい。

6　解答用紙にマス目（例：□）がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。

7　終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

受検番号
番

問一　次の問いに答えなさい。

(ア)　次のa～dの各文中の――線をつけた漢字の読み方として最も適するものを、あとの1～4の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

a　輪郭がぼやける。　（1　りんかく　2　わかく　3　わこう　4　りんこう　）

b　帳簿を確認する。　（1　じょうぼ　2　ちょうはく　3　ちょうぼ　4　じょうはく　）

c　市場で鶏卵を買う。　（1　こくらん　2　けんらん　3　こうらん　4　けいらん　）

d　考え方が幼い。　（1　あま　2　おさな　3　くら　4　あやう　）

(イ)　次のa～dの各文中の――線をつけたカタカナを漢字に表したとき、その漢字と同じ漢字を含むものを、あとの1～4の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

a　色とりどりのコッキが風でひるがえる。

1　開会式で選手団のキシュに選ばれる。　2　キケンな作業を無事に終える。

3　親戚の家にキシュクして大学へ通う。　4　キシャが煙をあげて走って行く。

b　新商品を大々的にセンデンする。

1　公演がセンシュウラクを迎える。　2　近所にあるセントウに行って疲れをとる。

3　裁判で無罪をセンコクする。　4　日々の運動が活力のゲンセンだ。

c　トウハを超えて協力する。

1　デントウの光が点滅する。　2　健康のためにトウブンを控える。

3　研究についてトウロンする。　4　セイトウごとの議席数を調べる。

d　得意な様子で胸をソらす。

1　地域のボウハン活動に参加する。　2　窓ガラスに太陽の光がハンシャする。

3　きれいにハンガを刷る。　4　ハンインの出欠を報告する。

(ウ)　次の俳句を説明したものとして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

（著作権上の都合により省略）

大須賀（おおすか）　乙字（おつじ）

1　夏の日の砂丘に夜が訪れて地面から離れた月が静止しているかのように空の一角で輝き、地上の月見草の花をいつまでも照らし続けている様子を、字余りとすることで効果的に表現している。

2　夏の夜の上空で輝いていた月が砂丘の地平に沈み、辺りが闇夜に包まれて月見草の花が月の光を僅かに残しているかのように地上で咲いている様子を、花の美しさに注目して表現している。

3　夏の夜に砂丘から昇っていた月が空の高いところまでどんどん昇って行き、空の下では月見草が花を咲かせている様子を、砂丘から離れる月と地上の月見草を対比させて表現している。

4　夏の夜に輝く月が砂丘に向かってあっという間に傾いて行くなか、月光を受けた月見草の花が闇夜に浮かび上がって見える様子を、「月」の字を二度用いることで強調して表現している。

問二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

江戸に住む十四歳の「円太郎（えんたろう）」は、「父（瀬川路京（せがわろきょう））」のもとで修業する歌舞伎役者である。修業の中で役者であることに自信をなくしていたときに、「小父（おじ）さん」と呼んでいる「浜村屋大明神（はまむらやだいみょうじん）（大明神・三代目瀬川菊之丞（きくのじょう））」に神社の前で出会い、悩みを打ち明けた。

（著作権上の都合により省略）

（著作権上の都合により省略）

（著作権上の都合により省略）

（麻宮（あさみや）　好（こう）「母子月」から。一部表記を改めたところがある。）

（注）与一＝「円太郎」より後に「瀬川路京」のもとで修業を始めた弟子。
滅法界＝普通の状態をはるかに超えたさま。
狂言作者＝ここでは、歌舞伎の脚本を書く人のこと。
口添え＝仲介すること。
上方＝現在の京都・大阪周辺のこと。
襲名＝親や師匠の名前を受け継ぎ、跡取りとなること。
女形＝江戸時代、歌舞伎では女性が舞台に出て演じることが禁じられ、男性の役者が女性役を務め、「女形」と呼ばれた。
江戸かぶき＝江戸周辺で発展した歌舞伎の一種。
おべんちゃら＝お世辞のこと。
かぶりを振った＝首を横に振ったということ。
うなじ＝首の後ろ。

(ア) ――線1「最後は声に出せなかった。」とあるが、そのときの「円太郎」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「父」に涙を流させるほどの「与一」の演技について「大明神」に説明することで、現実を直視して居たたまれなくなり、もっと励むよう応援してくれた「大明神」の言葉に応えられなくなっている。

2 「与一」の演技に涙を流した「父」の姿を「大明神」に話すことで、「与一」の演技には及ばないことを認めたようになって自らを傷つけ、醜い感情が現れかねないと感じて言葉にできないでいる。

3 「与一」の演技は「父」が思わず涙を流すほどよかったのかと「大明神」に問われたことで、演技を見たときの苦い記憶がよみがえり「与一」を妬む気持ちがあふれ出て来て、平静さを失っている。

4 「父」に涙を流させることになった「与一」の演技のよさを思い出して「大明神」に詳しく話しきったことで、自身の演技力が「与一」と比べて劣っていることに気づき、恥ずかしくなっている。

(イ) ――線2「大明神は切れ長の目を細めた。」とあるが、そのときの「大明神」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 兄は弟である自分が役者を辞めるように強く勧めたことで狂言作者の道に入って活躍し、以前に比べてはるかに輝くようになったという自分の考えを「円太郎」に伝えている。

2 兄は弟である自分に対して役者として負けたということを白状したことで役者の道を終わりにして、積極的に狂言作者の道へと入ったのだということを「円太郎」に伝えている。

3 兄は己にふさわしい居場所だと思って上方に独りで残り狂言作者になったのであり、弟である自分よりも劣っていると感じて上方に残ったのではないと「円太郎」に伝えている。

4 兄は己をはっきりと感じられる場所を選んで狂言作者になったのであって、弟である自分から逃げるために役者を辞めたのではないという自分の考えを「円太郎」に伝えている。

(ウ) ――線3「小父さんも何かを捨てたことがあるんですか。」とあるが、そのときの「円太郎」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 役者として輝かしい活躍を見せる「大明神」は、気負うことなく数多くの選択をしてきたことで成功できたのだとわかり、興味をもっている。

2 役者として成功して輝かしい存在であるはずの「大明神」でも、何かを選択した経験をしているのかもしれないと感じて、思わず質問している。

3 「大明神」のように役者として活躍していても、選択できずに苦しんだ経験をしているのかもしれないと思って、芸の道の厳しさに驚いている。

4 「大明神」ほどの役者が、他人の言ったことを気にしながら取捨選択してきたということに驚き、過去にどんなことがあったのかを聞いている。

(エ) ――線4「だってあんたはまだ子どもなんだもの。」とあるが、そのときの「大明神」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「円太郎」に対して、歌舞伎を始めてから今に至るまで役者の道においてしてきたことを振り返らせた上で、気持ちを奮い立たせるために、役者を辞めるかどうかを今すぐ判断するよう迫っている。

2 「円太郎」に対して、過去にしてきたことを思い返させた上で、歌舞伎の道を極めていくためには不真面目な性格を改めて、大人になる前にもっと苦労することが不可欠だということを述べている。

3 「円太郎」に対して、役者を辞めてもいいと思えるだけのことをしてきたのか問いかけた上で、「円太郎」は未熟な役者であり、まだ時間をかけることができる立場にあるということを伝えている。

4 「円太郎」に対して、役者として十分に苦労してきたのだからもう諦めてもいいのだと諭した上で、「円太郎」が大人になるまでには時間があり、新しい道がきっと見つかるということを示している。

(オ) ――線5「いいえ。」とあるが、ここでの「円太郎」の気持ちをふまえて、この部分を朗読するとき、どのように読むのがよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「父」に認められるような演技ができずに悩んでいたところ、役者としての「父」の実力を褒める「大明神」との話を通して、「父」の演技力の裏付けに毎日の修練があることを確信したように読む。

2 「父」に対して気後れしていたところ、「大明神」が「父」を軽んじていることがわかり、厳しい修練を毎日積むことで「父」を越えることができるかもしれないと思い、期待しているように読む。

3 「大明神」の演技を評価しない「父」の考えに疑問を感じていたところ、「大明神」が日々修練を積んでいると聞き、「大明神」を今後の目標にしようという自分の気持ちに気付いたように読む。

4 「父」が褒める「大明神」のようになりたいと思っていたところ、「大明神」から心情を表現できる役者になれと言われ、「大明神」を見習っていい役者になりたいと思い、憧れているように読む。

(カ) この文章について述べたものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 舞台での演技に伸び悩みすっかり自信をなくした「円太郎」が、立派な役者になれると断言してくれた「大明神」のおかげで立ち直っていくさまを、印象的な情景描写を挟み込んで描いている。

2 「大明神」に心情を吐露した「円太郎」が、自身の気持ちと向き合って役者の道に見切りをつけたことで新たな道に進もうと決意するさまを、作品中の人物の評価を織り交ぜながら描いている。

3 今後のことに迷う「円太郎」が、輝くことができずに苦しんだという「大明神」の話を聞いたことで自身の弱さを認めていくさまを、歌舞伎のセリフ回しや昔の言葉遣いを取り入れて描いている。

4 演技に引け目を感じていた「円太郎」が、「大明神」との話から演技を磨くためにできることについて考えたことで努力の大切さを思うようになるさまを、二人の人物の会話を通して描いている。

問三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

（著作権上の都合により省略）

（著作権上の都合により省略）

（著作権上の都合により省略）

（朝倉（あさくら） 友海（ともみ）「ことばと世界が変わるとき」から。一部表記を改めたところがある。）

（注）クオリア＝経験から生まれる質的な感覚。

(ア) 本文中の［A］・［B］に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　A　むしろ　　B　しかし　　2　A　たとえば　　B　では
3　A　つまり　　B　なぜなら　　4　A　ところで　　B　したがって

(イ) 本文中の〰〰線Ⅰの語の対義語として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　虚弱　　2　虚勢　　3　虚脱　　4　虚構

(ウ) 本文中の〰〰線Ⅱの「ない」と同じはたらきをする「ない」を含む文を、次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　暖房機器を買い換えたので冬でも寒くない。　　2　初めてする作業であり手つきがぎこちない。
3　毎日充実していて遊びに行く時間がない。　　4　事業が成功するまでは決して諦めない。

(エ) ――線1「『独りよがり』な見方というのは、何もそれを共有する人数が単数であることだけで言うわけではない。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　他者を想定しない自分一人の見方というものは、単独である場合に限って生まれるのではなく、似たような価値観によって構成された集団の中からも生じることがあるということ。
2　幅の狭い考え方によって生じる特定の見方というものは、特別なことや珍しいものではないためにどのような集団からも自然と生まれており、現実に数多く存在しているということ。
3　他者から離れた自己中心的なものの見方というものは、一人でいる状態のときに発生するものではなく、集団の中にあって多様な価値観と比較し合うことで作られていくということ。
4　自身の価値判断を中心においたものの見方というものは、人数が一人の場合に限って生まれるものではなく、色々な見方をもった多人数の集団で生まれることの方が多いということ。

(オ) ――線2「技術的操作性のようなものをすでにもっている。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　私たちの身体は他者に囲まれた環境にいつもおかれているため、意志に沿うことでなくても、周りの事物に対して常に必要以上に強い影響を与えてしまう力をもっているということ。
2　私たちの身体は多くの人々と絶えず影響を与え合っており、周囲にある事物の影響を受けることで、自己の意志と関係なく人々の考え通りの動きをしてしまうことがあるということ。
3　私たちの身体は多くの物体的なものと常にかかわり合いながら世界に存在しており、周囲にある事物に対して、意志に応じて影響を及ぼすことのできる力を備えているということ。
4　私たちの身体は他者に取り囲まれた環境におかれているが、周囲の事物に対して意志の通りに影響を与えることはできず、自身のことに限り自由に扱うことができるということ。

(カ) ――線3「視野の複数性」とあるが、そのことについて筆者はどのように述べているか。それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　他者の立場から物事を考えることは、自身と他者の見方を何度も突き合わせることで、自身の見方を無くして世界を見るようにすることであり、世界に対する理解を深めるには欠くことができない。

2　自身と異なる角度で世界を眺めることは、他者の存在を考慮するようになることに加えて、複数の他者とやり取りして他者の見方を取り込むことであり、世界を立体的に捉えるために必要である。

3　限られた範囲から抜け出して世界を理解することは、自身には分からなかったことを他者とのやり取りを通して考え直し理解することであり、他者の見方を世界に具体化させる際に不可欠である。

4　世界に対して様々な捉え方をするということは、他者と影響を与え合うのではなくて自身のことを思い返すことによって捉え方を見直すことであり、世界の奥行きを感知するために必須である。

(キ) ――線4「意見は確信へと変わる」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　世界の認識をそれぞれがもっているなかで、まだ確信を得ていない自身の意見について、他者の意見と同じ場合は自信がつき、尊敬する他者と同じであればより確かだと感じられるということ。

2　世界に対して別々の認識をもっているなかで、他者の意見と比較する際に、自身の意見を貫いて共通する点を完全に排除していくことで、自身の意見を確かなものにすることができるということ。

3　世界に対してそれぞれが別々の認識をもつなかで、尊敬する他者の意見については意見が同じかどうかにかかわらず全面的に受け入れることで、他者の意見を確実だと思うことができるということ。

4　世界に対してそれぞれが異なった認識をもつなかで、特定の他者の意見に左右されるのではなく、多くの他者と意見が同じである場合に限って自身の意見を強く信じられるようになるということ。

(ク) 本文を通して「承認」について筆者はどのように述べているか。それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　外界への認識の仕方を対象にして、自身の見方が他者と同じであるかどうか不安に感じて揺らぎやすかった状態から、他者の見方を一方的に取り込むことで安定した状態へと移行させる働きがある。

2　外界をどのように認識するのかということを対象にして、自身の見方が他者と異なっていることに悩む状態から、自身と他者の見方に共通点がなくても自己評価を保てる状態にする働きがある。

3　外界をどのように捉えるのかということについて、他者とのやり取りを通して揺らぎながら急成長していく状態から、局所的な見方に一度戻ることで、揺るがない状態に変化させる働きがある。

4　外界に対する見方について、自身の見方が他者と一致するのか分からないために不安定だった状態から、他者と同じだと確認し合うことを通して、安定し妥当性のある状態へと変える働きがある。

(ケ) 本文について説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「客観性」を得るには、異なる見方の可能性を排除し自身の見方を作り上げるとともに、他者の見方との違いを厳しく見極めることが重要だということを、他者とのかかわりを中心に論じている。

2　「客観性」を得るには、単一の見方から発展して、認め合いを経て他者との共通点を知ることで世界の見方について確信を得ることが必要だということを、認識の移り変わりを追って論じている。

3　「客観性」を得るには、世界を捉えるために他者と交流し認識を拡大するとともに、他者の意見を自身と同じものに変えていくことが必要だということを、現実離れした想定を出発点に論じている。

4　「客観性」を得るには、認め合いでは世界に対する認識を変えることができず、自身にだけ見えている世界があったことを忘れないでいることが重要だということを、成長の段階を例に論じている。

問四　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「丈山」は京の賀茂山に建てた小屋でひっそりと暮らしていた。冬の初めである旧暦十月に、昔からの友人で、武士を辞めた「小栗なにがし」が客として訪れたので、二人で話し込んでいた。

この客何となく、ふと立ちて、「我は備前（注）の岡山に行くことあり。」と言ふ。「今宵はここに。」と留めもせず、勝手次第（気ままに）と別れさまに、「またいつ頃か京帰り（京に帰ってくる）。」と聞けば、「命あらば、霜月（旧暦十一月）の末に。」と言ふ。「しからば二十七日は我が心ざしの日（大切な日）なれば、ここにて一飯必ず。」と約束[1]して、立ち行きぬ。

丈山その人の跡を慕ひて、滑谷越（注）に急がれしに、神無月（旧暦十月）八日の夜の月かすかなる、松陰より人の足音せはしきに立ち止まりて、「丈山か。」と言へば、「いかにも、見送りにこれまで。」と言ひけるに、「都に友もあまたなれど、心ざし（思いやり）はその方ならではあらじ（いないでしょう）。」と、立ちながら暇乞[2]して別れぬ。

その後備前に着きし便りもなく、日数ふりて、霜月二十六日の夜降りし大雪に、筧（注）汲むべき道もなければ、まだ人顔の見えぬ暁に、丈山竹箒（自分の手で取って）を手づからに、心はありて（風流心はありながら）心なくも、白雪に跡を付けて、踏石の見ゆるまでと思ふ折節、外面の笹戸を訪れし、嵐の松（嵐に吹かれる松の音だろうか）かなど聞き耳立つるに、まさしく人声すれば、明け渡る今、小栗なにがし訪ね来るに、そのさま破れ紙子（紙で作った粗末な衣服を一枚着ただけで）一つ前、門に入るより編笠脱ぎて、互ひの無事を語り合ひ、しばらくありて、「この度は寒空に、何として上り給ふぞ。」と言へば、「そなたは忘れ給ふか。霜月二十七日の一飯食べにまかりし（参上しました）。」「それよそれよ。」[3]と、俄に木の葉焚き付け、柚味噌（注）ばかりの膳を出だせば、食ひしまうて（食べ終わって）、その箸も下に置きあへず（置く前に）、「また春までは備前に居て、西行（注）が詠め残せし（和歌を作った）、瀬戸（注）の曙、唐琴の夕暮れ、昼寝も京よりは快し。」とて、取り急ぎて下りぬ。「さてはこの人、いつぞや仮初（軽々しく）に申し交はせし言葉を違へず、今朝の一飯食ふばかりに、はるばるの備前より京まで上られけるよ。」と、昔は武士のまことある心底を感ぜられし。（昔は武士だった人の）

（「武家義理物語」から。）

（注）備前＝現在の岡山県南東部。
滑谷越＝京の中心部へつながる道の名。
筧＝庭に置く、水を流すための竹筒。
柚味噌＝ゆずと味噌を使った料理。
西行＝僧、歌人（一一一八～一一九〇）。
瀬戸の曙、唐琴の夕暮れ＝いずれも和歌でよく用いられた瀬戸内海の情景。

(ア) ――線1「約束して、立ち行きぬ。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「小栗なにがし」は、引き留めて宿泊を促す「丈山」の申し出を断った上で、次に京へ戻って来るときには二人で一緒に食事をしようという約束を交わし、ただちに家を出て行ったということ。

2 「小栗なにがし」は、旧暦十一月の末に備前から京へ帰って来る予定だと伝えた上で、次に戻って来るときには「丈山」の小屋で一緒に食事をするという約束を交わし、すぐに旅立ったということ。

3 「小栗なにがし」は、翌月の終わり頃に備前から京に帰れるはずだと伝えた上で、次に戻って来て会うときには「丈山」のために食事を作るという約束を交わし、早々に立ち去ったということ。

4 「小栗なにがし」は、いつ頃に京へ戻れるのか知りたいという「丈山」の問いかけにこたえた上で、次に戻って来るときに一緒に食事をしようと自ら申し出て約束を交わし、すぐ出発したということ。

(イ) ――線2「立ちながら暇乞して別れぬ。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「丈山」が月のはっきり見えない夜に跡を追いかけて見送りに来たことに対して、「小栗なにがし」は京の多くの友人のなかでも思いやりのある人だと思い、短く別れを告げて去ったということ。

2 「丈山」が旅の道中を心配してわざわざ人に頼んで途中までついて行かせたことに対して、「小栗なにがし」は他の友人にはできないことをしてくれたと思い、短く伝言を残し出発したということ。

3 「丈山」が見送りのために家を出て闇夜のなか一人で待ってくれたことに対して、「小栗なにがし」は京の友人のなかでも特に思いやりがあると思って、短く別れの言葉を述べ出発したということ。

4 「丈山」が夜道を心配して跡を追いかけて見送りに来たことに対して、「小栗なにがし」は京に居るただ一人の友人である上に思いやりが深い人だと思い、短く別れの言葉を述べ去ったということ。

(ウ) ――線3「それよそれよ。」とあるが、そのように言ったときの「丈山」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 竹箒を手にして家のなかを掃いていたところ、庭の外から人の声がして、寒そうな格好をした「小栗なにがし」が真っ暗ななかを急いだ様子で約束通りやって来たため、驚きつつ喜んでいる。

2 雪を掃いていたところ、寒いなかにやって来た「小栗なにがし」が、粗末な身なりをして会うやいなや約束の食事をしたいと言ったため、備前からの旅の苦労を感じていたわろうと思っている。

3 竹箒を使って雪かきをしていたところ、約束よりも早く着いた「小栗なにがし」が、雪道を薄着のままやって来た上に身の上を心配して優しい言葉をかけてくれたため、たいそう喜んでいる。

4 家の近くで雪かきをしていたところ、備前に行っていた「小栗なにがし」が、雪の降った翌日の朝早い時刻に、衣を一枚着ただけの姿で現れ約束について話したため、心が動かされている。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「小栗なにがし」が備前から「丈山」のもとへ出した手紙に書いた内容の通りにはるばる京に来て、一緒に食事をしてくれたことによって、「丈山」は約束したことを守る誠実さを感じた。

2 「小栗なにがし」が雪の道を遠くからわざわざやって来て一緒に朝食を食べてくれた上に、「丈山」のために春まで京に滞在しようと言ったことで、「丈山」は深い思いやりを感じて喜んだ。

3 「小栗なにがし」が「丈山」と一緒に食事をするためにはるばる備前からやって来て、食べ終わるとすぐに帰って行ったために、「丈山」は武士だった人らしい約束を守る誠実さを感じた。

4 「小栗なにがし」が「丈山」のために京へわざわざやって来て一緒に朝食を食べてくれた上に、西行に関する歌の名所を一緒に見たいと言ったことに対して、「丈山」は喜びつつ感謝した。

問五　中学生のＡさんは、「言葉による創作活動」にとって大切なことは、知識や語彙を増やすことだと考えて本を読んできたが、実際に創作を行うとうまく進められないと感じていた。他の視点からの考え方も知りたいと思って自ら資料を調べ、二つの文章に着目した。次の**【文章１】**、**【文章２】**は、そのときのものである。これらについてあとの問いに答えなさい。

【文章１】

（著作権上の都合により省略）

（青田　麻未「散歩の技術」から。一部表記を改めたところがある。）

（注）そぞろ歩く＝あてもなく、気の向くままに歩き回ること。
フレーム＝ここでは、物事を鑑賞する視点や、意識の枠組みのこと。

【文章２】

（著作権上の都合により省略）

（浦川　通「ＡＩは短歌をどう詠むか」から。一部表記を改めたところがある。）

（注）言語モデル＝ここでは、ＡＩが人間の言葉をつくり出すための仕組みのこと。

(ア) Aさんは事前に自分の考えを書いた上で、【文章1】と【文章2】を読み、内容を次のようにまとめた。【Aさんのメモ】中の［Ⅰ］・［Ⅱ］に入れる語句の組み合わせとして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

【Aさんのメモ】

自分の考え　言葉による創作活動にとって大切なことは、知識や語彙を増やすことだと考えて本を読んできたが、実際に創作を行うとうまく進められないので、知識や語彙を増やすこと以外に何かが必要だと感じる。

【文章1】　散歩は、［Ⅰ］ものである。散歩をするなかで、日々の悩みや関心があることから離れられると、新たな気づきを得ることができる。

⇩ 言葉による創作活動にもつながるところがある。

【文章2】　短歌では、読むことと書くことに強いつながりがある。ただ、短歌は創作であり、他の人のつくった短歌を吸収してなぞることにとどまらず、［Ⅱ］ことを目指している。

⇩ 短歌以外の創作活動にも通じる。

1　Ⅰ　歩行そのものを楽しむ　　Ⅱ　世の中に存在しなかったものをつくる
2　Ⅰ　目的地に向かって歩いていく　　Ⅱ　過去の作品を学習した上で創作する
3　Ⅰ　通勤や通学と同じ　　Ⅱ　短歌によって驚きの連続を体験させる
4　Ⅰ　習慣に任せて自動的に歩き続ける　　Ⅱ　短歌を始めた頃のつくり方のままでいる

(イ) Aさんは【文章1】と【文章2】を読んで考えたことを次のようにまとめた。【Aさんのまとめ】中の［　　］に適することばを、あとの①～④の条件を満たして書きなさい。

【Aさんのまとめ】

【文章1】は散歩のことについて述べており、散歩によって日々の悩み事や興味を持っていることから離れることで、新たな気づきを得ることがあるとわかった。言葉による創作活動においても、同じことがあるのではないかと感じた。ときには今までこだわってきたことから離れることが必要なのかもしれない。

次に、【文章2】は短歌について述べており、言葉による他の創作活動のことにも関連していると思った。短歌を読むことは、短歌をつくることと強く結びついているようだ。ただ、読んだ短歌をそのままなぞるだけのつくり方ではいけないということがわかった。このことから、言葉による他の創作活動においても、過去の作品の再現にならないように気をつけるべきだと思った。

以上のことを踏まえると、言葉による創作活動にとって大切なことは、知識や語彙を取り入れつつも、［　　］ことだといえる。そうすると、創作を行うなかで新しい表現を生み出すことができるのではないだろうか。今後は、この考えに立って言葉による創作活動に臨みたい。

① 書き出しの［言葉による創作活動にとって大切なことは、知識や語彙を取り入れつつも、］という語句に続けて書き、文末の［ことだといえる。］という語句につながる**一文**となるように書くこと。
② 書き出しと文末の語句の間の文字数が**二十五字以上三十五字以内**となるように書くこと。
③ 【文章1】と【文章2】の内容に触れていること。
④ 「解放」「生成」という二つの語句を、どちらもそのまま用いること。

（問題は、これで終わりです。）

国
S